

# 中 国 古 塔 踏 査 記

## —陝西省の現況—

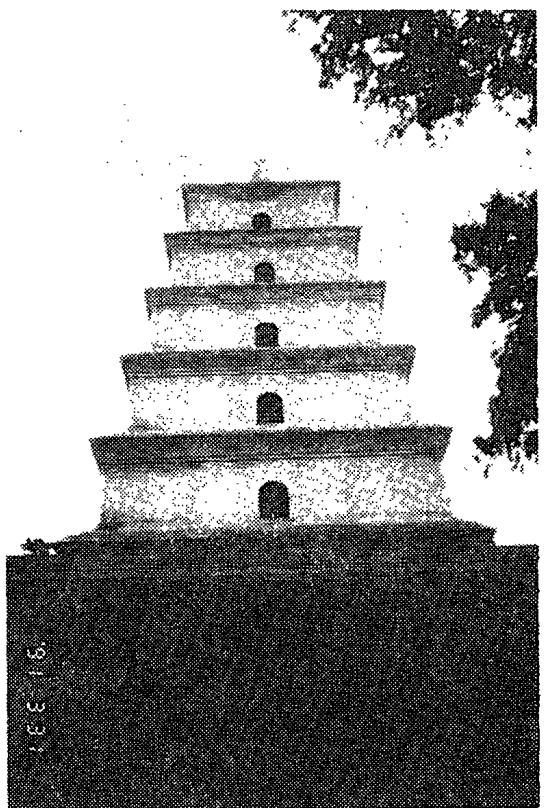
岡 島 秀 隆

はじめに

平成二年度、文部省『国際学術研究』「中国における仏教の伝播経路に関する実態調査」の一員として中華人民共和国（陝西省）の仏教史蹟を踏査した。筆者に与えられた研究分担事項は、「仏教文化の伝播経路に関する研究」であったが、筆者にはこのテーマを総合的視野から研究し、それに幾ばくかの結論を呈示することは困難に思われたので、中国古塔の調査にしばつて報告を試みることにした。

中国古塔の研究には、すでに中国古建築の研究などといった建築史的見地からも、また中国仏教史研究の立場から多くの先賢の成果が我国にある。『支那仏教史蹟』（常盤大定・関野貞 共著）や『伊東忠太建築文献・東洋建築の研

究』などの、この分野にあって世界に誇るべき業績が山積しているといつてよい。また近年においても、『中国建築史叢考仏塔篇』（村田治郎 著）や、『中国建築史の研究』（田中淡 著）などの優れた研究が出版され続けている。さらに、こうした日本での研究の他に、中国でも最近の研究は著しく進展しているようである。『中国古塔』（羅哲文著）、『中国古塔』（徐華鎧 著）などはその例といえよう。ここでは、こうした専門的研究に関わることは到底できないが、陝西省という地域にみられる数多くの塔のうちから、今回短期間に訪れることができた十数箇所について、余り知られていない小塔をも含めて、その保存状態や周辺環境の現状などを記すことに心掛けたい。



大 雁 塔

坊）にあり、南には遙かに終南山を望み、北には西安市街を見る形勝の地である。長安仏教研究叢書『大慈恩寺』（暢耀 編著）によれば、この寺は隋代には無漏寺と呼ばれ、唐の武徳初め（六一八）に廃棄された（他説あり）。しかし、貞觀二十二年（六四八）、當時まだ太子であつた高宗李治が早逝した母君の文德皇后の冥福を祈願して、その慈恩に報いんと祉を再建したことから現在の名があるとされる。

大雁塔は塔建時には「慈恩寺塔」と称され、唐の永徽三年（六五二）大慈恩寺三藏法師玄奘の発願によつて、印度から持ち帰った梵本仏教典を安置保存するために西域仏塔形を模して建立されたのである。建初、塔は五層で高さ十八丈（約六十米）の「磚表土心」方塔であつたとされる。その後五十年の風雪を経て、塔身荒廃するをもつて、武則天の長安年間に東夏の刹表旧式の形態に改造し以前より崇らしめたといふ。その後も整修を重ね、五代後唐の長興年間の修築（九三〇）によつて七層現在の塔形になり、また明清の重修を経て今日に至つてゐる。雁塔の名称の由来には、一雁が身を捨てて小乘漸教の比丘衆を大乗の正理に転

世に名高い大雁塔は「大慈恩寺」内に立つてゐる。今日の西安市城東南四キロメートルの雁塔村（唐代、長安城南の晋昌

帰させたとする「菩薩隨機誘導」の仏教故事によるとするものなどがある。

現存の塔は、塔高六十四米。磚造の基壇上に立ち、七層の軒をなす方形錐体である。底辺は各二十五米ある。磨磚を積み上げ、細部は木造建築を似せて、斗拱・欄額（頭貫）。方柱などの軒下組物が刻まれている（磚石仿木構造）。

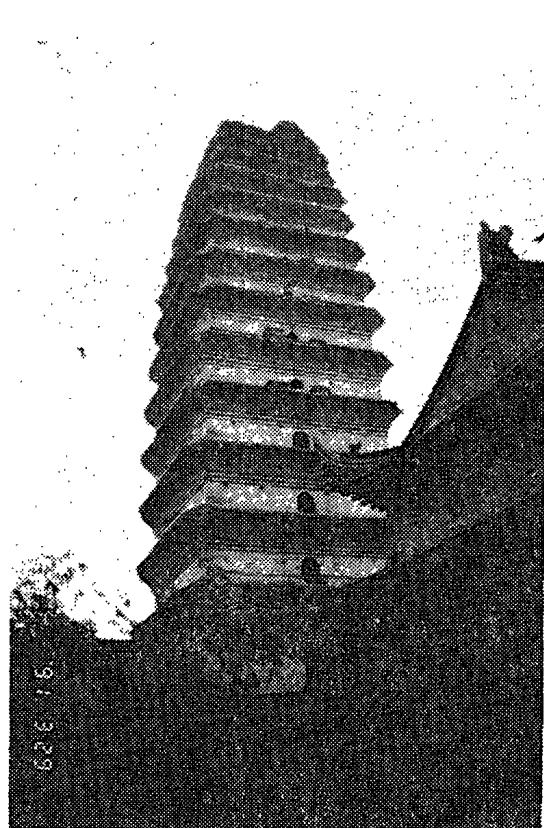
少し詳しく述べれば、初層・第二層外壁の方柱は一面に十本、第三・四層では八本、第五層以上はそれぞれ六本が等間隔に配され、その上に斗拱がのつていて。斗拱間には通肘木を支える間斗束のごときも見える。その上部持送りには、各二列の「菱角牙子」がならび、その上から煉瓦が逐次直線的にせり出している。典型的な樓閣式磚塔といえる。各層は徐々に縮小してゆき、塔刹には比較的重量感のある宝珠等が鈍い輝きを放っている。外観の印象は、各層四面にあるアーチ式の門を除けばほとんどが直線的輪郭を有し、黄土色の壁面とも調和してどっしりとした安定感がある。

また、内部は広く階段が最上階まで続き、各階から四方を見晴らすことができる。訪問時第七層は修理中で登れなかつたが、その他の階は階段をふみしめる音と人々の騒めき

が響きあつていた。古来よりこの地にその威容を示し続けてきたこの塔は、今もなお人々の最も親しみを覚える場所であり、國際都市西安の象徴といえよう。

### 小雁塔

西安城永寧門外西南の友誼西路南側に位置する「大薦福寺」内にある。この寺院は唐の高宗崩御から百日にして、文明元年（六八四）にその献福のために創建された故、初め献福寺と号したが、武則天の天授元年（六九〇）にこれ



小雁塔

を改めて薦福寺と名付けたといわれる。中宗の時期に大いに營飾を加えて寺内に翻經院を設け、義淨三藏を招したことから俄かに義學の道場となつたという。そして、小雁塔は寺中もつとも眼をひく建造物であるが、同じく中宗の景龍元年（七〇七）に初建され、宋・元・明を経て代々重修されて今日に到つてゐる。明の成化末には大地震によつて塔が真二つに亀裂を生じたか、再度の地震でその裂け目が元に戻つたといわれ、その稀有の事柄は「神合」の奇跡として現在にまで語り継がれてゐる。

塔は平面正方形の密檐式磚塔で当初十五層であつたが、最上部二層が失われ今は十三層が残つてゐる。従つて塔刹の様子は、古図等によつて知られるのみである。現在の塔高は約四十二メートルで、初層各辺十一・三八メートルといふ。塔は基壇上にあり、塔壁には柱などの装飾はなく塔の積み上けられただけのシンプルな構造で、各層の南北両面にアーチ式の門（窓？）が開かれている。各層の軒は下部から塔を内灣状にせり出す形式で、持送り下段は二列にわたつて塔の尖つた部分を外側に向けてならべる「菱角牙子」という組み方がなされて、實に幾何学的形式美を示してゐる。外観

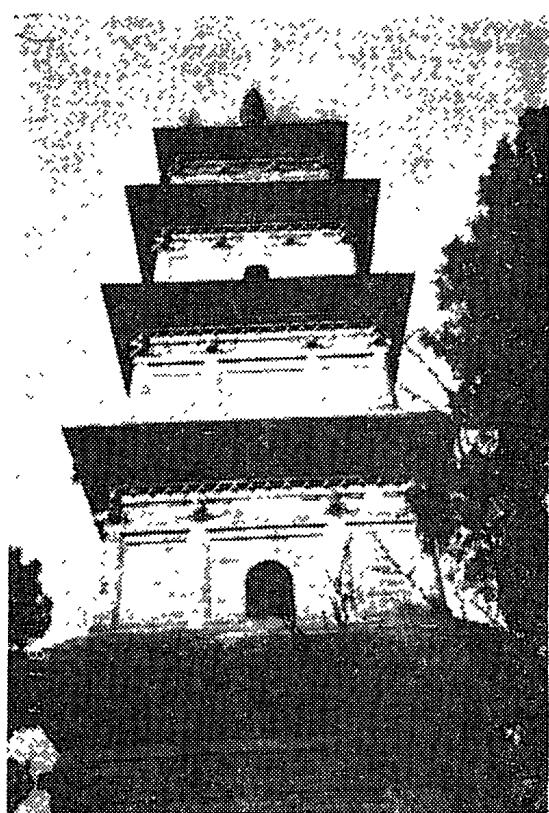
は各層が順次縮小して（五層以下は比較的緩かで、六層より急に縮む）砲弾状の優雅な景観をみせてゐる。初層は特に高大で、その南北に門がある。今は北門から出入りできる。門の上部には瓦ぶきの庇があり、その門楣（まぐさ）等には線刻供養天人和蔓草図案をはじめ精密流麗な飾りが施されている。塔内は空洞式で木構樓層をなし、上層へも登れるが内空間は狭く、外の眺望を楽しむには無理がある。大雁塔の男性的な姿とは対照的に、柔和纖細な印象を与えるこの塔は、その立地も前者と対照的で、同じ市街地ながらいっそう繁華で狭い場所に立つてゐる。

## 二、長安 県

### 興教寺塔

興教寺は、西安市東南の長安県杜曲の東、少陵原畔の南斜面にある。眼下に樊川盆地を見おろし、更に遙かを南望すれば終南の峰々がかすかにみられる長閑な農村地帯にある。かつては樊川八寺のひとつに数えられた寺院である。唐の高宗の麟德元年（六六四）に玄奘三藏法師が示寂する

と、初め西安東郊外の白鹿原に葬られたが、総章二年（六六九）に少陵原へ移して寺塔を造り、そこに舍利を収めたのがこの地であった。以後唐の肅宗がこの寺に遊び、玄奘塔額に「興教」の二字を書したのが寺名のいわれである。寺院堂宇のことごとくは清の同治年間に破壊されたものを近年再建したのである。ただし、玄奘舍利古塔だけは現在まで原形を留めている。また、玄奘塔の左右には弟子二人の塔がある。東側に西明寺圓測法師の塔、西に慈恩大師基公の塔である。



興教寺塔

この三塔の保存状態と様式を述べると、まず、両脇の塔は三層方形磚塔で基層にある半円アーチ門は中央の玄奘塔に向けられており、その上の第二層壁面には、それぞれ「測師塔」「基師塔」の塔造の額が掲げられている。軒下持送りは一列ずつの菱角牙子があり、その上から壇が積み出されている。屋根は平面方形でピラミッド形であるが、測師塔のほうだけが稜線にやや丸見がある起り屋根の形を示している。また両方とも屋根ぶきの壇は、塔身のものより黒味を帯びた壇を用いているようである。塔頂には各々宝珠を有する。

玄奘塔は方形五層の樓閣式仿木磚塔である。塔高二十一米、基層一边の長さは五・二米である。基壇は見られず、煉瓦敷きの平地に直接建てられている。塔内は玄奘塑像を納める小室があるが、墓塔であるために上の四層は土で固められていて登れないという。外壁面をみると、基層南面に門がある。内室へはここから通じてるのである。またその上部には「唐三藏塔」と刻された瓦製の額があがっている。更に東面の一、四層と南面三層のみに壁龕があり、不思議な形式である。基層四面軒下には壇で台輪と平三ツ

斗、拳鼻の組物が四組ずつ配され、その上に二列の菱角牙子と持送り積みの軒が造り出されている。二層以上は高さ、幅が少しずつ縮小するが、各面に八角柱が四本すつと、基層同様の軒下組物、頭貫がみられる。殊に周囲十二本の柱のうち四隅に配せられたものは、それが八角であることがはつきり判別できるほどくつきりと組み出されており特徴的である。軒構造も初層と同じで隅行先端には風鐸が下がっている。また、最上部の屋根にはわずかに反り<sup>そき</sup>が入っており、その頂には宝瓶、宝珠様のものが飾られている。また、三塔とも全ての軒先四隅の塙は上向きの瓜が出ていておもしろい。

玄奘塔は唐代の仿木樓閣式磚塔の最初期の遺物とされ、建築史的にも大変貴重なものといわれている。精密な修築がなされ、保存状態も良好なこの塔は、今なお緑多い丘陵地を背にして、南方には銀絲のごとき灞河と広大な農耕地、そして遠くに終南の峰を一望できるすばらしい地勢の中に静かな佇まいを見せていている。

## 香積寺塔

香積寺は長安県韋曲鎮西南の神禾原にある。西安城から約十七キロ米である。寺の創建時は從来永隆二年（六八一）とも、神龍二年（七〇六）ともいわれるが、長安仏教研究叢書『香積寺』（陳景富 編著）では前説がとられている。また、本書は寺名の由来についても、唐代この地に香積堰があつて、水を城中に導いていた故、その堰名に基いて付けられたとする説を本末転倒の誤りと指摘している。創建後、宋の太平興國三年（九七八）には開利寺と改称されたが、現在は唐代の呼称を復帰させている。



香積寺塔

香積寺塔は、中国浄土宗第二代祖師善導大師の崇靈塔（舍利塔）である。大師の円寂するや弟子の懷惲和尚が建立したとされる。初建時塔は十三層あつたが唐末の地震で塔頂が崩れ落ち、塔身にも中裂が入つたといわれる。その後も永きにわたつて風雪に苛まれていたのを近年修築したのである。現在は十一層が数えられるものの塔刹の在り様はわからない。現塔は密檐式仿樓閣結構の磚塔で平面方形をしていて、方形基壇上にのつていて初層毎辺九・五米。

各層は徐々に小さく積み上げられているが、全体の輪郭線は砲弾形というより角錐のメトロノーム形をしている。塔高約三十三米あり、特に丈高の基層には南面にアーチ式の門がある。今はその内側に泥水（コンクリート）で四角い門口を新たに造っている。東西北の三門は奥が塼で埋められ龕の如くになり、そこに更に小龕のようなものが設けられているが何もない。内部に入ると祭壇があり、その左奥から階段が上につながっている。二層以上はかつて木製の縁（樓板）があつたらしいが、各層の高さが急激になくなつていて、現今は下から二層、二層、三層、三層でそれぞれ一室となして床をはり梯子を掛けている。外壁をみ

ると、各層四方に門を開いている。そして、各壁面に四本の方柱と斗拱・頭貫が塼によつて造出され、また柱間をつなぐ頭貫の中央上には間斗と侏儒柱（束）らしきものがみえる。更に門の左右にある一本ずつの柱の間には窓枠も造られ、その内側には赤茶色で連子窓が描かれている。なお、同色を用いての彩色は柱・軒下組物等にも及んでいる。軒はといえば、各層とも二列の菱角牙子を含んで塼が内彎状に持ち送り積みされている。軒先隅行部分はいずれも荒廃が激しく風鐸などは見られない。

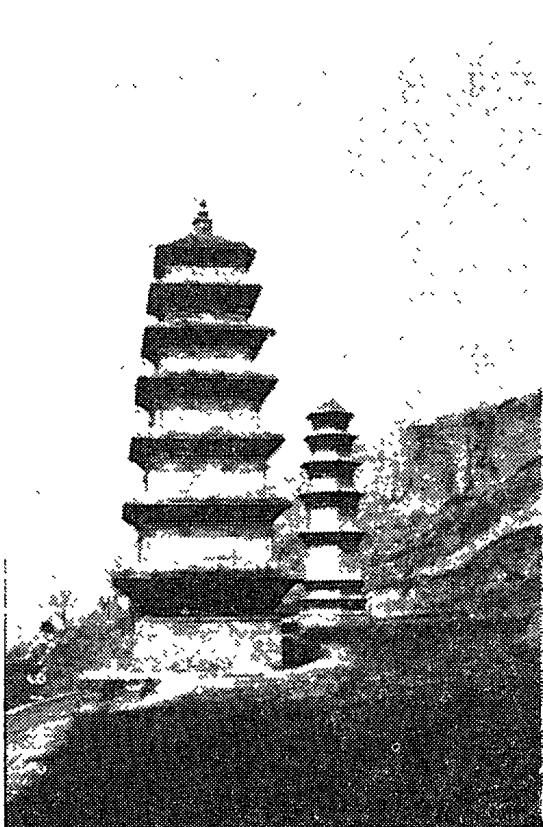
また、この塔の東方に小塔があつて、善導の塔と親子のようすに肩を並べていて、これは善導大師の弟子で香積寺主をもつとめた淨業和尚（六五四—七一二）の墓塔といわれている。方形五層の磚塔で、南面するすべての階にアーチ形の門があり、塔頂には宝珠を具えている。塔高は十米程度であろうか、軒に厚味があることと、初層とそこを開けられた門が極端に縱長なのが印象的である。塔身の規模のわりに随分広大な基壇上に今のところボツリと建つていて、塔の全体像は『支那仏教史蹟』にみる「百塔寺小塔」に酷似している。

香積寺の現在の寺域はさほど広いとはいえない。しかも、善導塔や大雄殿などの堂宇が並ぶ西域と、淨業塔と駐車場のある東域が墻垣とそれに沿って走る道路によって分断されている。寺の南側は「香積寺小学校」であるが、これは一九七五年に寺地を占用して設置されたものである。元はこの校内のほぼ中央に古山門があつたとされ、そこから北へ七百米いったところに古大殿があつたといわれるから、往年の寺域はかなり広範になると思われる。善導塔の頂上から眺めると、東方は彼方へと道路が続き、その左右に村落が連なっている。南方は鎧河が西南に流れてゆく。北から西にかけてはかつて長安八水のひとつに数えられたという灞河がこの寺院をとり巻くように東から北、北から西へと巡り、やがて南進して鎧河に合してゆくのが見える。この地域は水利が良さそうで、以前は深い緑におおわれていたとも聞くが、現今は四方に農地が広がっている。起伏の少ない、うららかな田園風景がどこかなつかしく思われる。

**華嚴寺塔**

西安城南少陵原の南畔にある。もと夏侯村と呼ばれたところである。華嚴初祖杜順の生誕地は雍州萬年県といわれるからまたこれも近隣である。杜順の活躍した当時、この一帯はそれまでの学解仏教にあきたらず、実践を中心とした仏教運動が盛んな、正しく華嚴宗発源地の名にふさわしい処であった。

華嚴寺にはかつて五塔があつたらしいが明代では二塔を残すのみだったという。現在はその二塔が修築されて建っているばかりで伽藍はない。東側にある平面方形の仿木楼



華嚴寺塔

閣式七層磚塔は、華嚴初祖杜順の塔である。近年現地に建てられた顯彰碑の裏面には貞觀十五年（六四二？）建立と刻されている。塔形は興教寺の玄奘塔に似ている。高さは二十一米ある。塔の下部は、水平面を得るために方形台基が丘陵斜面から半分ほどせり出すように築かれている。台基南面にはアーチ式の入口がみられるがセメントで塗り固められている。各層の軒下には磚で三ッ斗・台輪・頭貫・拳鼻・八角柱がくつきりと浮き出している（基層のみ柱なし）。組物は各面に四組がみられ、各層は上部ほど徐々に縮小している。これらの上にはそれぞれ一列の菱角牙子（基層のみ三列）を含む煉瓦の層が持送り積みにのつていて、その上は屋根である。各層四つの隅木部分には風鐸がある（今は一部が残っている）。塔頂には露盤と宝瓶様のものが視認できる。また、南面の一二層、三層と五層に上部にアーチ形を持つ龕がある。

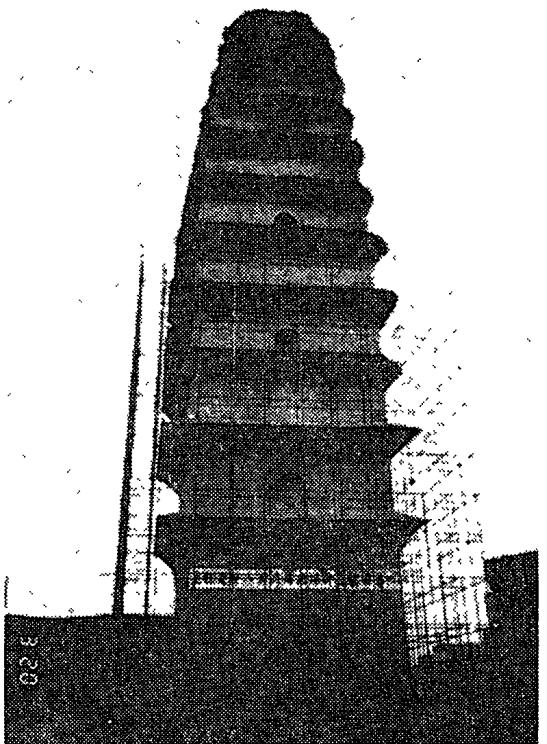
西側六角五層磚塔は華嚴四祖清涼國師澄觀の塔で『妙覺塔』と呼ばれる。この塔は元代の至元九年（一二七二）重修されており、さらに清の乾隆年間に中折したとき再建されたといわれている。大きな基壇はなく、数層の基台を重

ねた基部が上部を支えている。初層直下の基台二層は高く、丸見をつけた壇で組まれた剣形や巧緻な植物紋などの彫刻がみられ、羽目も入れられている。その上の各層の様子をみると、初層が殊に長高であるが、上るに従つて各層急激に高さを減じる。そして、全壁面には軒下に出組斗栱が四組ずつ、頭貫などもあり、その下には短い方柱が周辺を掘り下げる様式で描出されている。塔刹は六角屋根の上に小さな宝珠が輝いている。塔高は杜順塔の三分の二ほどであろう。

二塔は丘陵の中腹にあり、眼下には団地や学校のグラウンドらしきもの、また街路もみえるが、その南方には広大な平原が静かである。総じて地形は興教寺のそれに似ているが、周りに灌木は少なく、畑地になつてている。北側は黄土のむき出しになつた処が多い。土砂の崩落を防ぐためにアーチ形を持つ龕がある。

### 三、咸陽地区

#### 周至県・八雲塔



八雲塔

この塔は唐代造建といわれる（周至県文物管理所長 魏志徳氏によれば、景龍二年建立という）。この時代に当地に大寺「瑞光寺」なるものがあつたとされ、その瑞光寺塔であるというが、詳しくはわかつていない。基層の四面に雲形紋様が二つずつ浮き出していたことから、いつしれず「八雲塔」と呼ばれていたという。平面方形の磚塔で輪郭線は西安の小雁塔によく似ている。塔高は二十米程であろうか、低い台基上にある。軒は現在十一層が認められるが塔頂部の崩落が激しく、一説にはなお上層があつたともい

われる。建築上最も顯著な特徴は下部五層が樓閣式で、六層以上が密檐式の混合形式をとっている点である。基層の四面軒下には各四組の三ッ斗や台輪が刻まれている。二層から五層までは、さらに単純な斗拱と方柱が四つずつ造られ、その間に頭貫がみられる。その上には二列の菱角牙子を含んだ煉瓦の段がせり出して、軒下最上部は垂木の列がみられる。六層以上には軒下組物などの装飾は見られず、急に軒の間隔が収縮している。南北の壁面には、初層及び二層、四層（北面には無し）、六層、八、九、十層に、又東西の壁面では初層及び三、七、九層に門（或いは龕）が見られる。塔の内部には昔楼梯があつて階上に登れたというが、一九一二年、この地に蜂起のあつたときになくなつたという。現在この塔は全面的に修復作業が続けられているが、東に向かつて一・五米、北に向けて〇・五七米傾斜している。周囲を眺めてみると、塔の東には赤煉瓦の垣が南北に連なり、その東方は小さな空地となつていて、塔の南と西は民家や工場の建物が密集して迫つて来ている。北側は修復工事の管理所がある。印象としては、塔が街なかに唐突に出現しているようで、かつてこの地にあつた大寺

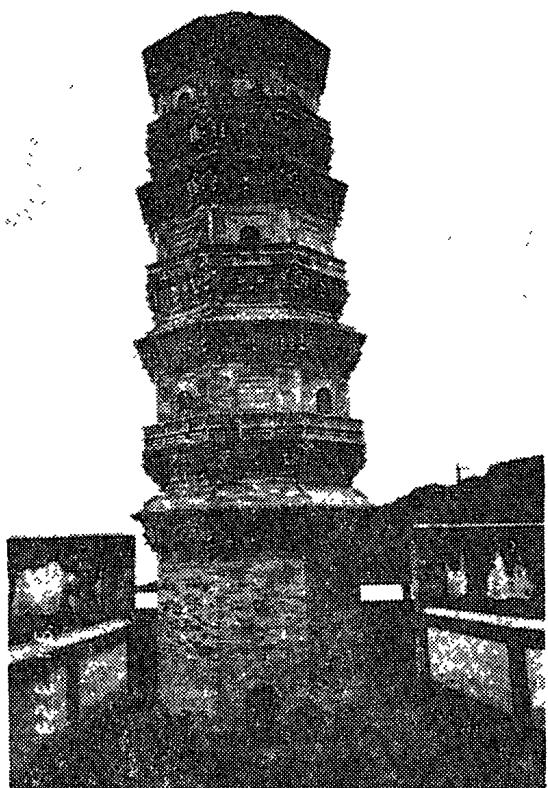
院の様子など想像もつかない状況である。

### 永寿県・武陵塔

麟游県から尾根づたいに黄土の山岳地を進んで永寿県に入る。途中処々に残雪が見え、高地であると知られる。山

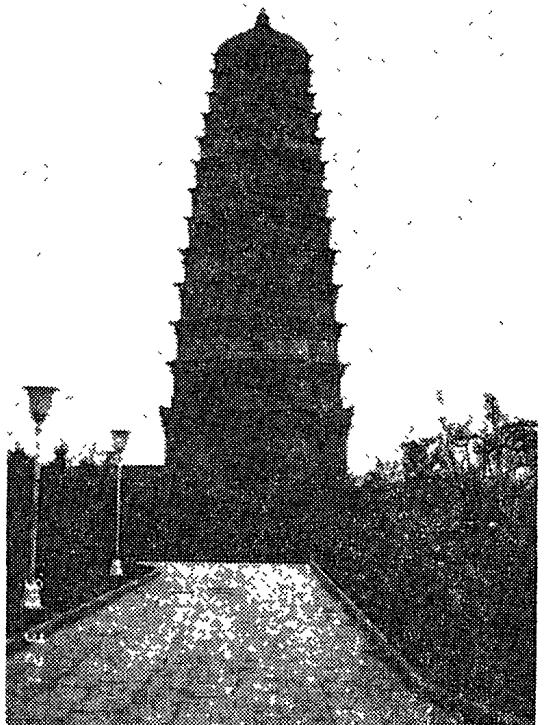
々の陵線をはずれて少し下ったあたりで武陵寺塔が眼に映つたとき、それは小山の上に立っていた。山間の見晴らしのよい立地である。そこは道路がふた手に分岐する地点で近くに村落が見られる。小山を十米程度登ると平坦な場所

があり、顯彰碑がある。宋代の塔と記されている。近隣にはまた「重修武陵寺碑記」があつて清の道光十一年に重修されたと知られる。この塔についての記録は少なく、わずかに永寿県史に載せられているらしい。



武陵塔

典型的樓閣式磚塔で少し傾斜しているが修復及び保存状態は良好である。塔の周囲は少々窪んでおり、その周りを屏が方形にとり巻いている。入口階段を下ると煉瓦敷きの平面となっている。そこから見上げた塔は黒味がかった壇造である。八角四層をなすが初層は極度に新しく思われるから近年修復したのであろう（一門あり）。軒下斗栱などもこの層だけは煉瓦を二枚重ねしたものを加工している。柱の間隔も上部と異なっている。二層以上の様式をみてみると、下層の軒の上に二手先腰組（三ッ斗）がみられる。八つの隅は斜斗栱で、その間にさらに計八箇が組まれている。その上には一軒の垂木とさらに軒平瓦様に加工された壇が一列に並んでいる。その上には組高欄がある。一面に四本の斗束、栢束がみられ、また、架木と平桁の間には板状の壇がはめ込まれ数種の紋様が刻まれている。高欄上の造作は中央にアーチ門と板扉が各面交互にあり、その左右



崇文塔

上部には小さな盲連子の窓がみられる。門と板扉（饅頭形の飾りあり）の配置は毎層入れ違えとなっている。軒まわりにも腰組と同様の組物があり、その上に二軒の垂木と軒平瓦様の埠が一列ある。すべての平行材は隅で交差して木鼻を外に出している。塔頂は崩れていらしく、宝珠等は見あたらない。鎏金塔の形式と思われる。

涇陽県・崇文塔

涇陽県の南十キロメートル、涇河の北岸の平原に忽然とその威

容を現わすこの塔は、かつてこの地にあつた「鉄仏寺」の寺塔である。当地の「崇文塔簡介」によると、明代万暦十九年（一五九二）李世達なるものによつて重修され、二十一年の歳月をかけて落成したという（別に、一層完成に約一年、計十八年を用したともいう）。清の同治九年（一八六二）の「花門の変」でも寺は焼けたが大門樓と塔は残つたようである。現在の塔は、明のもので塔高八十五米を越え、層数も十三をかぞえる。塔の周囲には方形に煉瓦の堀が巡り、南方に通用門がある。門の外には左右に植え込みの設けられた立派な舗装道があり、その傍に管理所も作られている。正面から仰ぎ見る塔の姿は壮大である。塔は方形基壇上にあり、基層一边九米の八角多層構造をなしている。基層南正面にはアーチ式の門が開き、その奥に版門（板扉）がある。門の上に「崇文宝塔」の額もみえる。基層内部は壁面に化粧が施され、上部に続くアーチ式登上口がある。埠造階段を二層へ上るとアーチ式大龕が一つあり、八角の内回り壁面にも一壁に一つずつ龕が掘られている。龕中に像はない。第四層まで同じような構造だが第五層の内側壁龕はすべて一壁三龕（方形）の形式である。この階

から左にカーブしたステップを六層へ上ると壁面に碑文が多く埋めこまれている。いづれも明代造塔時の施主の寄付銘のようである。七層より上は各層にもの見窓があり景観が楽しめる。第十層の階段は右へカーブし、登りきると龕が一つある。そこには細工を施した台座が残されている。

第十一層は回廊を左右両方に巡ることができ、外側の壁に二龕ずつある。第十二層は、内側壁面に二つずつ、外側の二壁だけに一つずつ龕を掘る。さらに頂上への回廊は急に狭まる。塔頂へ出ると、その基部に小龕が一つある。このようすに全ての層には少しずつ異なった配置でアーチ式の龕が多数見られる。そして、塔刹にはかつて蓮華葉があり、その外に羅漢像、中央に仏陀像があつたといわれるが、今は宝瓶様のものだけが残っている。

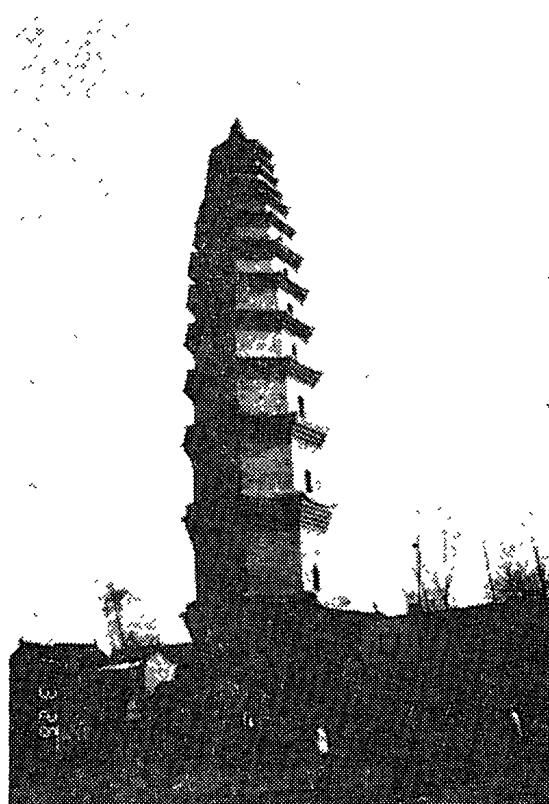
この塔の外面は青磚が縦横交互に組み上げられ、各層八面にアーチ式の窓及至龕がある。龕には明代に計六十四体の坐仏がおさめられていたというが、残っている仏像の頭部も今はすべてない。各層軒下には四組の斗拱と周辺組物がある（底層のみは軒が重層式で斗拱も多い）。さらにその上には支輪（檼？）、菱角牙子、一二軒の垂木などがみら

れる。また、隅行斗拱の下には一周八本の円柱が立っている。

この塔の四隅は平らな農地が広がっている。直下の広場にはサッカーゴールがおかれ、東垣の外からは学校らしき賑かな音声も聞こえてくる。

### 高陵県・三陽塔

この塔は唐代中期の建立といわれる。別名三陽寺塔ともいわれるが、その三陽とは涇陽・渭陽・咸陽をいうらしい。



三陽塔

塔南の民家の屋外に正徳十六年（一五二一）立石の「重修招慧院記」があり当時の様子を示している。平面八角の密檐式磚塔でスリムな砲弾状をしている。塔高は五十三米、底層一边四米程である。現在塔の周辺を整備中で北側の登入門脇に顯彰碑を建てていた。南正面にまわって眺めると十三層が数えられる。底層では北面に一龕を見る他は南に正門が開くだけである。そこから内部に入ると正面に大龕のある広間である。階上へは一人がやっと通れる塙階段が作られている。二階以上には壁に二番から十三番までペンキで番号が付されている。七番より下は比較的広い室内空間があり、煉瓦の床がはつてある。処々の壁面には小龕が堀られている。その上部では数層が吹きぬけとなつておらず、必ずしも外観の層数と室の数とは一致していない。細い階段は最後に塔頂の屋根の上へ続いている。

外壁をみてみると、二層より上はベタ積み煉瓦壁の東西南北にアーチ形を用いた窓が設けられ、各層軒下には全面三組ずつの斗拱組物が眼に映る。八隅のものは三ッ斗のようで肘木上に斗がみえる。その間に等間隔に一つずつ組まれているものには斗がみられず、舟肘木様に見えるが小さ

くてよくわからない。この肘木には彫刻をほどこしてある。また、すべての斗拱には木鼻が突出している。斗拱の上部には持ち送り状に雁木型突出（菱角牙子）が二列ずつ四層あり実に美しい幾何学文様を現出している。更にその上は、大きく彎曲させた垂木の列と屋根があり、その軒先隅木には風鐸がゆれている。全体をみると、異形とまではいかなが、十層以上は急に各層の大きさが縮んでいるようである。塔頂には宝瓶がみえ、また南面の下部三層には額が上げられているが文字はない。

この塔は現在、高陵第一中学の校内にある。南は何かの礎石らしきもののあるわずかの広場を隔てて教場が連なり、北はすぐに運動場となつており、いつも生徒達の騒さの中にある。学校の周囲は村落であるが、その周りは一面の平らかな農地である。

### 彬県・彬県塔

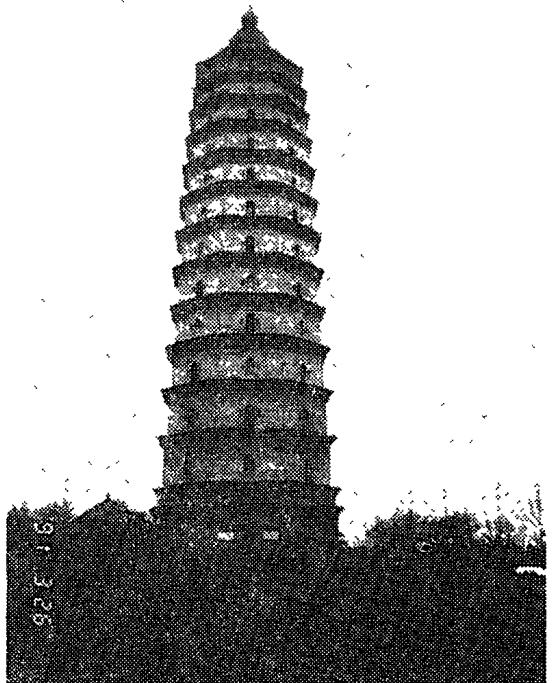
彬県は涇河南岸にある。その市街地に彬県塔は立っている。家並の続く街路を南に入ると南方近くに丘陵が見え、それを背景にしている。謂はよくわからないが宋代の建と

いう。畠地の中に煉瓦の垣が巡らされているだけで、その中に立っている。中に入れないで管理責任者に聞くと、塔高四十六・九米、外径十四・五米、内径七・五米で空洞があり、上へ上れるらしい。内部には銅製の銘文があるといふ。塔の外観をみると、基層の壁面は平坦なベタ積みの壇でおおわれ、わずかに軒下に斗拱（二手先・三ッ斗）があつだけである。二層以上の形式は同じなので次に記すことにする。下層の上に腰組斗拱がみられる。八つの隅だけはぶつかり合う二壁面に平行する方向とこの二方向の二等



彬県塔

分線上の方向に斜め斗拱が組み出されている。隣合う隅行の間には等間隔に斗拱が並び、その上に一列の樋、そして組高欄がある。高欄の斗束、桶束は一面八組あり、込桶はないが、地覆と平桁の間には組子様の装飾がある。その上部は中央にアーチ式門か板門が一つおきに造られている。その左右には八角柱が二本ずつ立ち、二柱の間にはそれぞれ連子窓が造出されている。柱の上部には頭貫が通り、その上の軒廻りには各面六つの台輪と二手先斗拱がある。これらの形式は腰組とほぼ同じだが、二手先目の斗の上に舟肘木のような長い横材があることのみが異なる。その上は二列の菱角牙子を含む壇の層が持送り積みされ、二軒の垂木をもつ屋根を支えている。斗拱・高欄・柱・窓などは赤茶色に彩色されている。この形式が次層では一面どちらか横へズレるので門の開き方は隔階ごとに同じとなる。塔の全容は八角七層の樓閣式磚塔で軒先隅木の鼻は竜頭形である。竜頭はそれぞれ姿が違い、竜の六子ではないかともいわれる。邪氣祓いの意があるらしい。その顎には風鐸が下がっている。塔刹は蓮華弁のようなものの上に宝珠らしきがのり、水煙のかパラボラ状に二輪（？）が見える。



法門寺塔

この塔は市街地にあるといえるが、その西側は運動場や舞台などがあり、比較的広い平地が付随している。

#### 四、宝鸡市

##### 扶風県・法門寺塔

法門寺は現在の陝西省扶風県の城北十キロメートルの法門郷にある。扶風県の地勢は北高南低で西北部には岐山県があり、北方には麟游・永寿などいずれも山間台地である。南方に

ははるかに秦嶺が横たわり、靈峰太白山は海拔三七六七メートルにも及ぶ。これらの峰々の北面を流れ下った流水はやがて渭河をなすことになる。扶風は渭河より北に二十四キロメートルの平原に位置することになり、土地は肥沃で美しい。また扶風は古来より関中（陝西）から隴（甘肅）を経て蜀に入る主要道が通り交通の要衝で、天宝年中に玄宗が乱を避けて蜀へ向つたのもこの道であつた。また、玄奘が求法の旅の折、法門寺を訪れ、故国に別れを告げたのは貞觀三年（六二九）のことだつたともいわれる。

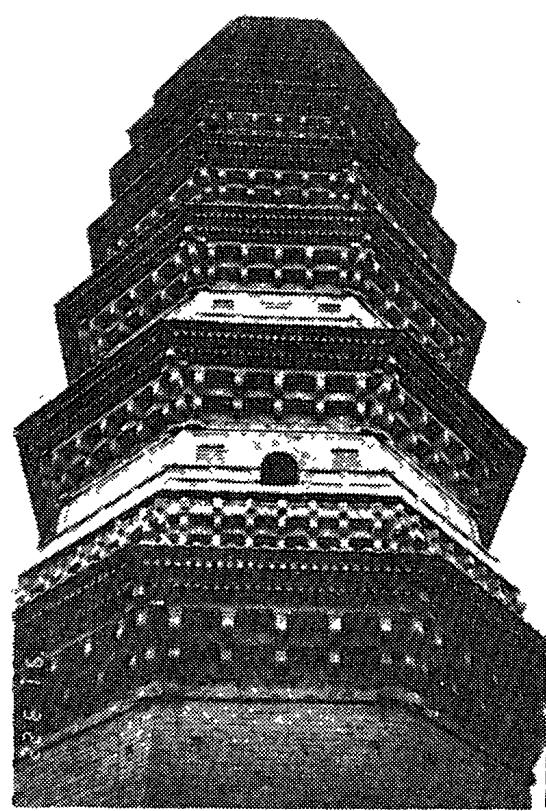
さて、この地に法門寺あつて、その寺塔に仏舍利（仏指骨）の納められていることはよく知られている。この寺院と塔はいつ頃創建されたのであるうか。法門寺は古くは「阿育王寺」といい、その塔は阿育王塔と称されたという。一説には、この塔は阿育王の造つた八万四千塔の一という。あるいは、仏典東來時（東漢？）に建立されたとする説もあるがいづれも判然としない。長安仏教研叢書『法門寺』（陳景富 編著）では、諸説を綿密に考察したうえで、今日見聞できる法門寺最早期の文物「千仏殘碑」の記載から、北魏孝文帝の太和二十三年（四九九）か、その後久しから

ずしての建立であろうと推定している。これは「無憂王寺真身宝塔碑銘並序」に、南朝齊・梁時にこの地は未だ「晦迹丘墟」だったとの記とも符合するという。

以後唐代には仏舎利供養の地として四大佛教聖地の一に列せられ、明代には唐建木塔が崩壊したので磚塔を重建したという。この明塔は一九八一年に塔頂から底層まで真中に亀裂を生じ、半分が崩れ落ちた。その修復中の一九八七年には、塔基下から唐咸通十五年（八七四）建造の地宮がみつかり、仏舎利や多くの供奉品が出土して世紀の大発見となつたのである。

現在の塔は修理も完了しておちついた佇まいを見せていい。地宮は見物客に解放されているが、大半の宝物は隣接する博物館に移されている。現在、塔高約四十五米あるトウモロコシ状の八角十三層磚塔には登れない。南正門はアーチ式で、上部に「真身宝塔」の額が掲げられている。その上には軒下に台輪が築かれ、その下に等間隔で一周二十四本の短柱が下がり、柱と柱の間は笈形を逆さ吊しにしたような装飾がある。そこには竜などの見事な彫り物がみられる。台輪上は出組三ッ斗がある。一周三十二組あり、三

方に木鼻を出すものと、正面にだけ出るものと交互に並んでいる。さらに八方の隅木、二軒の檼と軒瓦が美しい曲線をなしている。瓦当は解らない。八方の隅棟は天に突き出している。底層の軒の上は第二層の腰となるが、ここも美しい花紋が彫られている。その上は高欄が二層だけにあり、その下段には格狭間に細かい彫刻が見られる。二層は八角柱が隅を支えて立ち、軒廻りには頭貫・台輪・出組斗栱が周囲を巡るが、底層ほど飾りはない。その上は埠が持送り積みされているだけであり、隅木には風鐸が吊されている。



太平寺塔

## 中国古塔踏査記（岡島）

また、すべての壁面にアーチ式の龕がみえる。三層以上も同じ形式だが、最上層には龕がみられず、塔頂は八角ドーム形の屋根の上に宝珠、宝瓶様のものが置かれている。塔周辺の広い区域が整えられ、宿泊施設も完備した観光名所の趣きがある。

### 岐山県・太平寺塔

宋代の塔である。『改修太平碑記』によれば八一二年頃建造が開始され（木造？）、その後一〇八八年に重建された折に太平寺塔と銘名されたという。塔は堅牢で九百年余を経てもわずかの風化と傾斜があるだけである。一五五五年の大地震でも残っている。明代八フウチク（？）の一つで、三年前に改修を完了している。

この塔は九層八角の仿木樓閣式磚塔である。全体は砲弾状に見える。八角形の小さな基壇上にあり、東西南北の壁面だけにアーチ式の門か板扉が造られている。南北面は二、四層に門が開き、三、五、六層に板扉が刻されているが、その上はよく見えない。東西面は一、三層に門があり、二、四、五、六層に板扉が見えるが、その上は解らない。塔高は二十八・二米で、内部は二、三層まで登れるらしい。細部の特徴をみると、底層の軒廻り以上に木塔を模した組物等が見られる。まず斗拱は、ほとんどが一手先の三ッ斗で横に広がらず縦に直列しており（双称斗拱）、一列の通肘木も見える。八隅は斜斗拱である。上層は小さいので、第八層軒下は出三ッ斗に略され、九層では斗拱を見ない。腰組に斗拱があるのは二層のみで、第三層の腰部には瘤形のものが積まれている。初めは蓮華座かとも考えたが、それなら高欄の上部かとも思われ、何より形が蓮弁とは思えない。そこで中国側に聞くと仮平座との答えだった。また、各層に高欄があり、その上には一周二十四本の方柱が立つ。壁面で門・扉のあるところには必ず横連子窓が左右一対彫られていているのがおもしろい。更に軒下の垂木は、地檼が円柱、飛檼檼が方柱となっている。塔刹はこんもり隆起しているが宝珠などはないようである。

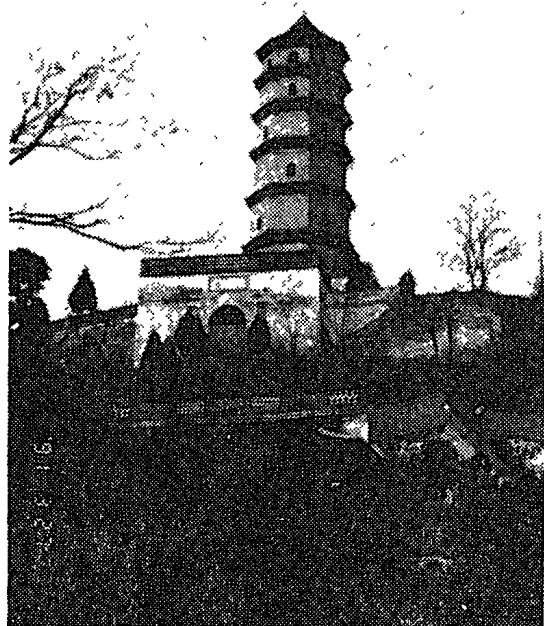
この塔も騒かな市街地にある。入り組んだ街路を進むと一対の門柱があつて、そこに「岐山県初級中学」「岐山県職業中学」と記されている。門を過ぎると比較的大きな校庭があり、その奥中央に塔が立っている。授業時間を報じ

るベルの鳴り響く校内に黄土色の塔は相変わらず立ち尽している。規模は小さいが、無駄のないしっかりした姿を今もとどめている。

## 五、渭南地区

### 韓城市・円覚寺塔

市街を見おろす高台に、「韓城市烈士陵園」がある。相当広い領域が、現在は革命烈士の陵墓と記念館などにあて



円覚寺塔

られている。大門を入ると八一台という長い階段があり、その上に山門があつて初めて仏教建築に行きあたる。山門を通過すると整備された内庭があり、庭の中ほどに第一烈士記念館がある。この北には更に四八台と銘名された階段があり、その上に「韓城革命烈士記念塔」がある。これは陵園の中心的建造物であり、その左右には墓区がある。その背後を登ると円錐形の屋根をもつ「天壇仲亭」を見る。中空に大鐘が釣られているから鐘楼である。これは唐代のものといわれる。ここにはもう一つ明代のつり鐘もあり、「円覚禪院」の寺名がみえる。その北面はいつそう急勾配の崖となり、その上に平地がある。そこに一塔が立ち、後ろに第二烈士記念館がある。この古塔は「円覚寺塔」といわれ、金代の大定十三年（一一七三）の建立である。この地に金の統治が及んだということであろうか。

塔形は六層八角の多層磚塔である。四層からなる平面方形の大きくしかもおもしろい形の基壇部を持つ。基壇の最下層は、東西二方面から南上がりに付いた階級部及び基壇南方を城壁のように取りまく広い煉瓦塀に連なっている。また、下から三層目の基壇側面は台形をなし、最上層には

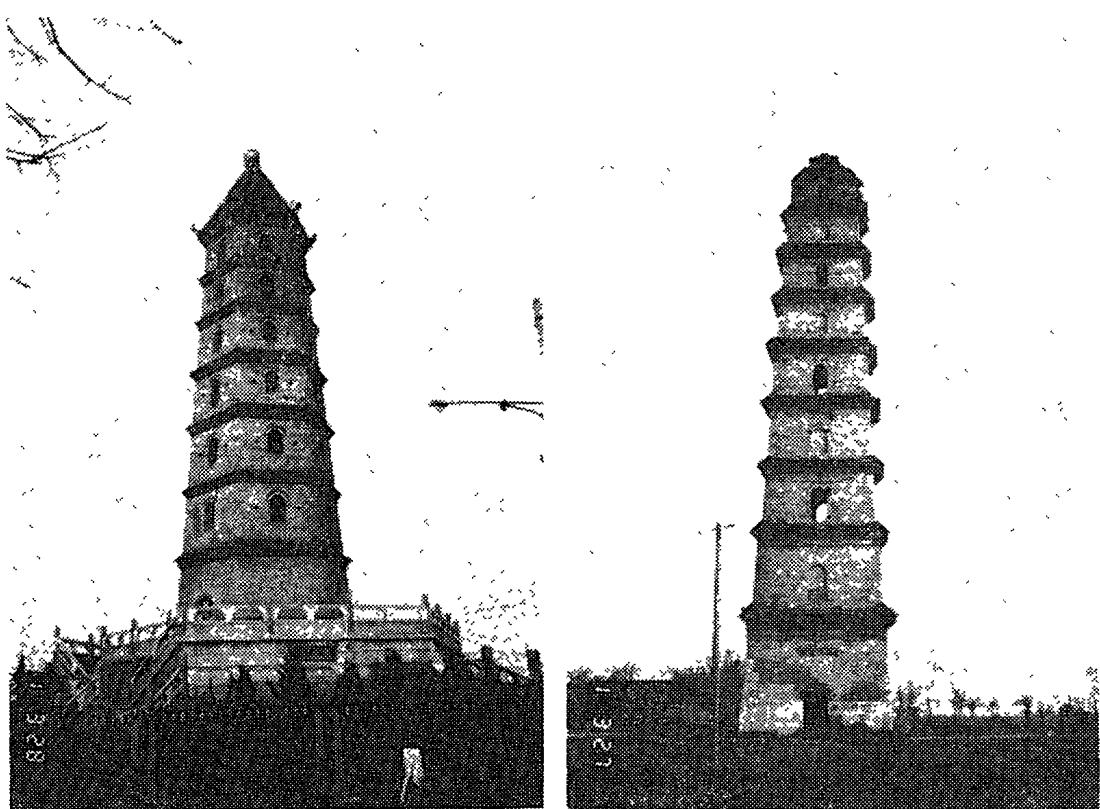
中国古塔踏査記（岡島）

東西北の三方にアーチ形壁龕がある。基部階段を登つて塔の南に立つとアーチ形正門がある。底層には更に三つのアーチ形窓があり、東西南北から明りを得ることができる。

この方向に窓があるのは第三層である。二層と四層では窓が東西南北だけに開かない。五層の窓は五つの方向にある。南向きの三壁面と北向き三面のうち真北の壁を除く二面である。塔の外壁にはほとんど裝飾がなく、軒下八方の隅行に出る木鼻とその左右に平たい雲形が彫られているばかりである。軒は一番下に一列の菱角牙子を含む数段の平積み壇が積み出されている。塔刹には宝珠等見られず、こんもりと中央のもり上がった屋根がある。また、軒隅先端の処々に風鐸が残されている。

正門から内室に入り、上部を見上げると、最上層まで空洞が続いており、床張りの名残りであろうか、東西、南北に木材が渡されているのが見える。

ここから南方をみると眼下に韓城の街が一望できる。こじんまりと整った美しい家並と道路添いに街路樹の緑が清しい。近郊には青菜類のビニール栽培が盛んである。この烈士とビニール栽培と街路樹の町は、東と西に走る山並み



文殊新塔

鎮風宝塔

に挟まれて、あたかも陸の港といった地勢にある。

おりに

この報告にあたり、建築用語の修得不足などから正確な記述に徹することができなかつたことを深く反省している。また、渭南市北効でみた「鎮風宝塔」や大荔県「文殊新塔」、草堂寺の「羅什塔」などについて記述できなかつたことを付け加えておかねばならない。

最後に、今回限られた日程の中で調査しえた古塔は二十に足りない。未だ我々に知られぬ多くの文物が、あたかも天空の星々のように、この広大な中国の大地で眠っていることを痛感させられた次第である。